

教育心理学年報 第5集

論は一種の習慣形成過程で説明できるものであり、その内容も嗜癖性一般に通ずる理論でなく、社会的・身体的に見て悪癖とされている嗜癖を持ちやすいパーソナリティに関する理論ではないのか、とただした。ついで野辺地（同志社大）は、この理論では現在の dynamics だけがとりあげられているに過ぎないが、過去の生活史をどのように考えているのか、と主として理論構成の根本的な立場についての批判がなされた。これについて水島は、津留の指摘事項については全く同感の意を表明し、野辺地には、過去の生活史は現在的人格に統合・反映されているはずであり、そうでないようなものは考慮する必要なし、とあくまでも現在に重点を置いた立場を強調した。

施設児のホスピタリズム

石井（326）の研究については、宮本（北学大）から、施設収容児の家庭環境は非常に悪いのにもかかわらず

ず、施設児達の家庭的欲求が強いのは何故か。また、指導上この家庭的興味をとる方が良いのか、どうか、という質問がなされた。これについて石井は、面会回数の少ないことが親を理想化させ、家庭的欲求が強まるとの考えをのべ、指導としては親の離婚、三角関係等、人災により収容されたものは、施設に対する適応という点から見れば、家庭的興味をとる方が望ましいと答えた。

児童における manifest anxiety

奥野（327）の研究は normative study であったので、あまり活発な討議はなかつたが、外国のテストを日本語に翻訳するとき、かなりわが国の国情にそわぬものがあるのではないかと、との批判があつた。これについて奥野は、原文に忠実なものも結構であるが、とくに小学校児童に適用する場合には、思い切つた改変が必要だとの考えを明らかにした。

（岩田茂樹、奥野茂夫）

3-3 人格・適応

331 日本の男女大学生のもつ女性の役割観について

○稲垣 知子（京都大学）
佐藤 幸治（ ）

332 日本男女大学生の米国女性観に関する研究

○滝本 和子（京都大学）
佐藤 幸治（ ）

333 青少年の生活意識とマス・コミ

○山根 薫（埼玉大学）
長瀬 邦三（ ）
先崎 正次郎（ ）
長塚 和弥（ ）

334 態度変化における認知—感情の再体制化と不安

原岡 一馬（佐賀大学）

335 道路交通に対する関心についての—研究

田中 敬二（静岡大学）

部会の全体的特徴

本部会の研究発表は、(1)稲垣ら（331）の日本の男女大学生のもつ女性の役割観について、(2)滝本ら（332）の日本男女大学生の米国女性観に関する研究、(3)山根ら（333）の青少年の生活意識とマスコミ、(4)原岡（334）の態度変化における認知—感情の再体制化と不安、及び(5)田中（335）の道路交通法に対する関心についての—研究、の五つからなっている。

本部会の全体的特徴としては、次の三つのグループがあげられる。すなわち第1は稲垣らの研究及び滝本らの研究からなる日本男女大学生の日本女性観及び米国女性観に関する研究である。第2は、山根らの研究及び田中の研究で、質問紙による意識関心度の調査で、前者がマスコミ問題、後者が道路交通法の問題であつた。第3に、原岡の研究で、個人内の態度構造変化に伴う不安現象に関する研究であつた。

討議の内容

ここで行なわれた討議は、主として、第1グループと第3グループとであつた。

第1グループにおいて、稲垣らの研究に対し、牛島（九大）は、日米の女性の役割観を比較すると自己概念、理想像、及び男性がもつと思われる女性の理想像に

についても全体的に、アメリカの方が他者指向的で、特に理想像においてその傾向が強いのはどのように解釈できるかと質問し、このことによつて討議が展開された。これと直接関連をもつ滝本らの研究も同時に討議された。

稲垣は、同じく他者指向的とか自己指向的とかいつても、日本人の受取り方とアメリカ人の受取り方とでは次元が違うのではなからうか。すなわち、日本人は自分自身に対して関心が強く、アメリカ人は他人に対して関心が向けられるであろうと回答した。山根（埼玉大）は、近代化など、アメリカと日本とは異なり、やはり次元が違うのではないかという意見を出し、長瀬（埼玉大）も、アメリカと日本とでは、行動上のずれ、質問に対する反応態度の差があるのではないかと主張した。

原岡（佐賀大）は、牛島らが先に行なつた西欧と日本の人間形成に関する研究においても同様に、日本の子供の方がより自己本位の考え方をしていたという研究結果を指摘し、また、本研究において、自己指向的質問項目も、他者指向的質問項目も、例えば、私は私に権力をおしつけようとする人々に反対する。とか、女性の生活において、結婚と子供は、第一番に考えられるべきである。などの具体的問題であるため、質問に対する反応態度にそれほどの差があるとは考えられないのではないかと述べ、この問題について更に検討することを提案した。牛島（九大）は、少なくとも、この調査結果通り、日本の男女大学生の観念としては、アメリカ大学生よりも、より自己指向的だと結論すべきではなからうか、勿論、行動と考え方とは区別しなければならないであろうと述べた。佐藤（京大）は、観念と行動とを区別し、観念についての調査の他に、行動観察が必要であることを指摘した。

これらの問題を中心に調査対象の違いと質問紙法の妥当性・信頼性の問題まで討議が進み、反応態度の違いは、質問紙の信頼性を明確にしてくれば、それに伴つて明確になつてこようし、これと同時に行動観察により妥当な解釈ができよう。また地域差、年齢差、男女差、学歴差なども大きな条件であろうという結論になつた。

第2グループにおいて、山根らの研究に対し、牛島（九大）は、テレビをどのようにみるかという、テレビをみるに当たつての態度が生活に影響するのではないかと質問し、佐藤は、テレビの見方の他に、テレビの影響の仕方に、同調的影響と補償的影響があるのではないかと指摘した。これらの問題は確かに重要ではあるが、本研究の段階では、これらの問題に対して回答はできないか、それは今後の問題として考慮している旨回答があつた。

第3グループでは、原岡の研究に対し、永田（国鉄労研）が、態度変化は、態度そのものの性質の違いによつて異なるのではないか、また、ここで考えられているモデルは、正の方向への態度変化、負の方向への態度変化のどちらにも適用可能であるかどうかを質問した。原岡は、本研究では、正の方向をもつ態度を負の方向に変化させることのみを試みたが、他の研究において、態度構造の違いにより態度変化に影響があることを見出したことを報告し、ここでのモデルは、本質的には、正負両方の態度変化に適用可能であるとの回答を行なつた。岡路（北学大）は、5回にわけて与えられたコミュニケーションを、それぞれ同一の重みと考えてよいかどうかを質問し、更に感情的成分の適切な測定法について質問した。原岡は、すべてのコミュニケーションが同一の重みを持つとは考えられないが、一個のコミュニケーションと、それに同一の方向づけをもつ他のコミュニケーションを加えることによつて、前の重みよりも次の重みを大であると考えたと回答した。また感情的成分の測定法については、Rosenberg, M.J. の方法、Festinger, L. の方法などについても論議を行ない、現在の所、感情的成分の言語的表現として、SD法を用いているのであるが、今後より適切な方法が見出されれば、それを使用したいし、その方法を探究したいという結論に到達した。

本部会の出席者は、十数名ではあつたが、上記の如く活発な意見の交換が行なわれ、いろいろな問題点が指摘されて、今後の研究方向と考え方を明確にした点で有意義であつた。

（山根 薫，原岡一馬）

3—4 人 格・適 応

341 適応の指標としての自己概念の検討

（1）自己概念間の Discrepancy
と Y. G. テスト

椎 野 信 治（山形大学）

342 回想自己と適応の研究

○山 下 恒 男（東京教育大学）
長 島 貞 夫（ ）